

福祉用具利用における、理学療法士に期待される関わり方

理学療法士・介護支援専門員・福祉用具プランナー管理指導者
中村 静江

1. 研究の背景と目的

福祉用具の利用に関わるにあたっては、利用者及び家族が満足する福祉用具の利用が進められるように多職種が協力し連携がとられなければならない。相互の理解が十分得られておらず、多職種間の連携が十分図られないと、利用者の福祉用具の選択や利用の際に非効率さや問題を生じさせる要因になり得る。そこで、本研究では福祉用具利用において理学療法士に期待されている関わり方について、福祉用具利用に関わる職種へのアンケート調査をすることで、福祉用具専門相談員、作業療法士、介護支援専門員は理学療法士にどのような関わり方を期待しているのかを明らかにする。

2. 方法

1) 調査対象

①理学療法士 ②福祉用具専門相談員 ③作業療法士 ④介護支援専門員

2) 調査方法

①東京都下 A 市で 2013 年 3 月に開催された「福祉機器展」参加者に対して無記名自記式質問紙記入の協力を依頼しその場で回収した。

②2013 年 3 月～4 月にかけて同様のアンケートを東京都下 A 市の地域包括支援センターおよび居宅介護支援事業所に配布し郵送にて回収した。ただし調査対象は④介護支援専門員のみ。

3) 調査内容

質問項目は計 8 問。「福祉用具利用に関わる理学療法士の実態について」など 6 問を選択式で、「理学療法士が福祉用具の利用に関わるとしたら、どんなときに関わってほしいか」および「福祉用具の利用に理学療法士が関わったことで、良かったこと困ったことがあるか」の 2 問について自由記述で求めた。

3. 結果

回答総数 366 人のうち有効回答数は 264 人であった。調査結果によると、理学療法士に対して、利用者の身体機能評価および ADL 評価といった専門性が求められていることが、また「指導適合」や「困難事例」に関わることが期待されていることがわかった。また、理学療法士の意見が「福祉用具の選定」に大きな影響を与えていることが示唆された一方で、「理学療法士が選定した福祉用具の不具合・不適合」といった失敗例も多いことが明らかとなった。

4. 考察

福祉用具利用に関わる理学療法士に期待する項目を「指導適合」、「困難事例」、「メンテナンス」の 3 つの場面から尋ねたところ、「指導適合」と「困難事例」において関わりを期待すると答えた割合が高かった。この結果は、身体機能・ADL 機能の評価が重要な判断材料となる際に理学療法士の専門性が必要とされるためと考えられ、理学療法士の助言への期待度が高いと考えられた。しかしその一方で、福祉用具の「選定」および「適合」の場面では、成功例も多いが適切な選定、適合作業が実施されていないなどの失敗例も多い実態があると推察された。今後、理学療法士は地域・在宅において、福祉用具利用の際における身体機能評価や ADL 評価といった専門性を一層向上させる必要があり、また、理学療法士は他の職種からの指摘を踏まえて協働作業の視点を持つと同時に、利用者のみならず関係職種に提示することが重要であり、今後の課題であると考えられる。